

ヴェルレーヌの詩「夜鳴き鶯」について

小 川 敏 栄*

1

ヴェルレーヌ (Paul Verlaine, 1844 - 1896) の詩に表題の鳥が登場する最初の作品である「夜鳴き鶯」 *Le Rossignol* は、彼の処女詩集『土星びとの歌』 *Poèmes saturniens*, 1866の三番目の章「かなしい風景」 *Paysages tristes* に収められている。この詩は従来、象徴主義の詩の先駆的作品として (マルチノー)¹⁾、あるいは詩人の秘められた恋をさりげなく明かす告白として (ボルネック)²⁾ 注目されてきた。この小論では、夜鳴き鶯を歌ったフランス詩のいくつかを瞥見したあと、ヴェルレーヌの作品を読み、その特質を考えてみたいと思う。変化に富む鳴き声で知られ、^{いにしへ}古より詩人たちに愛されてきたこの鳥を歌った詩の系譜を迎えることは、ヴェルレーヌの詩を読むうえで資するところがあろう。

はじめに掲げるのは、十七世紀前半の詩人フランソワ・メナール (François Maynard, 1582 - 1646) の短詩である。

Charmant Rossignol, dont la voix
Interrompt le profond silence
De ces Rochers et de ces Bois
Où l'Été perd sa violence,

Si la Bergère que je sers
Revient jamais dans ces Déserts,
Apprends à cette Âme cruelle

原稿受付：昭和62年4月4日

*新潟大学教養部

Que l'eau qui coule entre ces Fleurs

Est un petit reste des pleurs

Que j'ai versés pour l'amour d'elle. ³⁾

季節は夏の終り。夜鳴き鶯の声が四田の深い沈黙を破って響く。その夜鳴き鶯に呼びかけて、つれなく去った恋人 (la Bergère) がもしいつかここに帰ることがあったなら、花々の間を流れるこの小川は私が彼女を思って流した涙の名残だと伝えておくれ、と訴えている。時刻はむろん、たそがれ時 (l'heure du berger = 恋人たちの時) が似合わしい。夜鳴き鶯に恋の嘆きをことづけるのは、たまたまその場にこの鳥がいたからではない。その哀調を帯びた声がかことづての内容にふさわしいからである。いや正しくは、夜鳴き鶯のメランコリックな鳴き声が、ことづての訴えという考えをひきおこしたのだというべきだろう。この鳥にあっては、「鳴く」(chanter) は「泣く」(pleurer) に通ずる。

鳩が純潔と平和のシンボルであるように、夜鳴き鶯は伝統的に恋の抒情のシンボルとされるが、この鳥に関して注意しなければならない点は、シンボルよりもむしろ神話にある。トリスタン・レルミット (Tristan L'Hermite, 1601 - 1655) の有名なオード「二人の恋人たちの散歩道」*Le promenoir des deux amants* に次の四行がある。

Ce rossignol mélancolique

Du souvenir de son malheur

Tasche de charmer sa douleur

Mettant son histoire en musique. ⁴⁾

おのれの不幸を思い起こし

愁いに沈む夜鳴き鶯は

苦しみを和らげようと

身の上話を調べに託す。

この「身の上話」に耳を傾けた詩人はフランスにもイギリスにも多い。それゆえラファディオ・ハーン（小泉八雲）は東京帝国大学で日本の学生たちに、夜鳴き鶯（ナイチンゲール）を扱った英国抒情詩について講義するにあたり、「ナイチンゲールを歌った傑作を理解するためには、しばらく古代ギリシアの神話歌謡にたち戻る必要がある。（中略）物語はかなり忌わしいものであるが、われわれは知っておかねばならない。」⁵⁾と前置きして、オウィディウスの『変身譚』（第六巻）にもとりあげられているピロメラーの話を紹介している。アテーナイ王パンディーオーンの娘ピロメラーは姉の夫であるトラキア王テーレウスに辱しめを受ける。口外をおそれたテーレウスはピロメラーの舌を切り取ってしまう。これを知った姉は幼いわが子を殺し、その肉を夫に食べさせて復讐する。逃げる姉妹にテーレウスが追い迫ったとき、二人は神々に祈り、姉は燕に、ピロメラーは夜鳴き鶯に変身する。なお、ハーンは触れていないが、ピロメラーの名は「甘美な調べ」の意であり、テーレウスはピロメラーの美声に魅せられて恋に陥ったとされている。

こうした伝説をもつ夜鳴き鶯を詩人たちはピロメラーの名で呼んだ。ハーンは先の講義で、シェイクスピア（1564 - 1616）の喜劇『夏の夜の夢』 *A Midsummer Night's Dream* の妖精の子守唄（第二幕第二場）にある、《Philomel, with melody, / Sing in our sweet lullaby》（ピロメラーよ、快い調べで、/われらが甘い子守唄を歌え）で始まるコーラスを引用したあと、「シェイクスピアの時代には、芝居見物の一般常連でさえ、ナイチンゲールに代わるものでして、ピロメラーという名はすでに聞き慣れていたことが、ここからわかる。」⁶⁾と述べている。フランスの詩における例としては、シェイクスピアの死の三年後に作られたサン＝タマン（Saint-Amant, 1594 - 1661）の代表作「孤独」 *La Solitude* の一節を引いておこう。

Que sur cette épine fleurie,
Dont le printemps est amoureux,

Philomèle au chant langoureux,
Entretient bien ma rêverie!⁷⁾

春の愛でる

この花の咲く西洋さんざしにとまり、
いかに豊かにピロメラーはものうい歌で
私の夢を育んでくれることか!

もちろん、夜鳴き鶯をピロメラーと呼び、その悲話についての知識を前提とする詩作は、時代をくだるにつれて少なくなっていく。たとえばヴェルレーヌの場合、少なくとも『知恵』 *Sagesse*, 1881までの詩集に「ピロメラー (Philomèle)」の語は一度も出てこない。しかし重要なのは神話そのものではない。夜鳴き鶯の聲がこうした神話と結びつきうる事実である。本物の詩人なら、神話を知っているかどうかにかかわりなく、声の主が恋と死の秘められた結びつきを教えていることを感じとるはずだ。

ヴェルレーヌより三歳年長のカチュール・マンデス (Catulle Mendès, 1841 - 1909) は高踏派のプロテウスともいうべき存在であるが、最初の詩集『ピロメラー』 *Philoméla*, 1863の中の「夜鳴き鶯」 *Le Rossignol* は、もはやギリシアの伝説によりかかってすまずことのできない近代の詩人が創造した、「ピロメラー」の声の特質を明かす新たな変身譚であったといえよう。その冒頭とその後の展開は次のごとくである。

C'était un soir du mois où les grappes sont mûres,
Et celle que je pleure était encore là.
Muette, elle écoutait ton chant sous les ramures,
Élégiaque, oiseau des nuits, Philoméla!⁸⁾

それは葡萄の房が熟れる月の、ある宵のこと、
そして今ぼくが泣いて悲しんでいるあの女性^{おんな}が、まだ去らずにいたと
きのこと。

おし黙って、あのひとは木の枝のかげから聞こえるおまえの囁きに耳を傾けていた。

哀れに歌う、夜の鳥、ピロメーラーよ！

人形芝居に釘付けになっている子供さながら、目をうっとりさせ、口を開いている恋人を見て、「ぼく」は夜鳴き鶯を妬ましく思う。「恋人よ、あんな鳥なんか、ほうっておきなさい！」と「ぼく」は言うが、恋人は耳を貸さない。次の瞬間、恐ろしい戦慄がからだを貫いて走り、「ぼく」は変身している。大切な恋人の傍には一人の男がいて、二人はため息をつきながら闇の中へと歩んで行く。恋の無惨な成り行きに、夜鳴き鶯となった「ぼく」は枝の上で嘸り泣くばかりである。恋敵の腕に身をあずけた恋人の白い姿がゆっくりと遠ざかる。すべては終わった。翌朝早く、通りかかった子供たちが榎の木の前もとに、乾いて固くなっている鳥の死骸をみつけた。一人の子供が葦の葉かげに「ぼく」の墓穴をほってくれた。そして「ぼく」の羽毛に土をかぶせながら、小鳥のために神様に祈ってくれた。

この詩で語られる変身と死という出来事は、読者をおのずと寓意的な解釈へと導くだろう。たとえばこんな風に読んでみることができる。恋人は「ぼく」の存在をよそに鳥の声に聞き惚れている。そう思いこんだ「ぼく」は鳥の声を邪魔者扱いにする。つまり「ぼく」は鳥の声を聞いていない。ところで鳥の声とは、聞く者から独立した存在として人を魅するわけではなく、いわば聞く者の感情の象徴として己れを主張するものである。「ぼく」は恋人の心のうちに潜む不安、危惧、あるいは過去の暗い影といったものに気づくべきであった。それが鳥の声を聞くことの意味だったのである。「ぼく」は罰として鳥に変身させられる。このとき初めて「ぼく」には鳥の声の意味がわかる。しかるに「ぼく」の鳴き声の意味は恋人に伝わらない。恋人は先程のように耳を傾けず、男とともに立ち去る。鳴き声で人を魅する（引きとめる）ことができない夜鳴き鶯は存在の理由がない。かくて「ぼく」は死を迎える。

「ぼく」は鳥の姿で、恋人の失われたのを嘆き、嘸り泣いている。そう

なったのは、恋人がおし黙ってその囁りを聞いていた夜鳴き鶯に、「ぼく」が嫉妬したからだ。とすると、この夜鳴き鶯は「ぼく」から恋人を奪っていった男とも読めるだろう。「ぼく」が鳥に変身しただけではない。「ぼく」と鳥がいれかわったのではないか！ 枝にとまったまま悄然として動かぬ夜鳴き鶯は、単なる失恋の悲しみのせいではなく、他の男を選ぶというかたちで恋人に存在を否定された者の、心の傷の深さのゆえに死んだのかもしれない。

いずれにせよ、この詩はヴェルレーヌの気に入ったことだろう。彼の自伝『告白』 *Confessions*, 1895 によれば、マンデスの『ピロメラー』はパリの市役所に勤め始めた二十歳の頃のヴェルレーヌの「枕頭の書」⁹⁾ であった。醜貌の彼はマンデスの夜鳴き鶯に自分を重ね、さらには、自分は夜鳴き鶯（＝詩人）として生きるのだという決意をいっそう強く固めることになったのではないか、とさえ想像されてくる。

マンデスの詩の出来事すべてが語り手自身の回想として語られていることにも注意しておこう。「ぼく」は夜鳴き鶯となって死んだのだが、そのことを思い返している「ぼく」が別にいる。「ぼく」は変身（*métamorphose*）だけでなく、転生（*métempsychose*）をしている！ 十年後「カレイドスコープ」*Kaléidoscope* という名作をものすることになるヴェルレーヌなら、この詩を初めて読んだとき、あるいはそんな発見に驚いたかもしれない。

2

ヴェルレーヌの「夜鳴き鶯」の創作年ははっきりしないが、『ピロメラー』を読んだあとと考えるのが順当だろう。今は思い出の中にしかない女性を思って泣くという状況は、マンデスの同題の詩に似ている。しかしヴェルレーヌの詩は、寓意の存在をはじめに明示することで、逆に寓意を中心にすえた読みへの意欲をそいでいる。詩人の意図はともかく、これは大きな相違である。

LE ROSSIGNOL

Comme un vol criard d'oiseaux en émoi,
Tous mes souvenirs s'abattent sur moi,
S'abattent parmi le feuillage jaune
De mon cœur mirant son tronc plié d'aune
Au tain violet de l'eau des Regrets
Qui mélancoliquement coule auprès,
S'abattent, et puis la rumeur mauvaise
Qu'une brise moite en montant apaise,
S'éteint par degrés dans l'arbre, si bien
Qu'au bout d'un instant on n'entend plus rien,
Plus rien que la voix célébrant l'Absente,
Plus rien que la voix — ô si languissante! —
De l'oiseau que fut mon Premier Amour,
Et qui chante encor comme au premier jour;
Et, dans la splendeur triste d'une lune
Se levant blafarde et solennelle, une
Nuit mélancolique et lourde d'été,
Pleine de silence et d'obscurité,
Berce sur l'azur qu'un vent doux effleure
L'arbre qui frissonne et l'oiseau qui pleure. ¹⁰⁾

夜鳴き鶯

おびえて騒がしく群れ飛ぶ鳥たちのように、
思い出という思い出がぼくを襲う、
ぼくの心の黄ばんだ葉むらのうちへと襲いかかる、
憂いも深くかたわらを流れる
「悔恨」の水のすみれ色の鏡に

榛^{はん}の木に似てくねった幹を映している心の葉むらへと、
 襲^{かき}いかかる、やがて喧^{かき}しいざわめきは
 しっとりと吹き寄せるそよ風に静められ、
 しだいに葉陰に消えてゆき、ついに
 一瞬ののちにはもう何も聞こえない、
 ただ一つ「不在^{ひと}の女性」を称える声、
 — あんなにも物憂い！ — 声を除いては、
 それはぼくの「初恋」だった鳥の声、
 今なお初めの日のように歌っているのだ、
 蒼白^{あざ}く蔽^{おほ}かにのぼる
 月がかなしく輝く中に、
 重く憂わしい夏の夜は、
 沈黙^{しじま}と闇にみちて、
 やさしい風が無^なでて吹く青空に
 震える木と泣く鳥をゆずっている。

ヒチコックの映画を連想させないでもない一行目の「群れ飛ぶ鳥たち」は、いちどきに寄せるさまざまな思い出の直喩である。比喩は二つのものの類似によって成り立つが、相違をも前提とするから、比喩の適切さを納得した読者は他方で、思い出の内容と鳥とは無縁であるとうけとるだろう。詩は、三行目から寓意としての風景を描き出す。冒頭から第六行までの部分では、思い出の襲来という事実の提示と、自然風景へのその形象化がなされている。

第七行の「喧しいざわめき」も、もちろん思い出にとまなう心の動揺、悲しみや苦悩の表現と読めるのだが、このあたりから叙述の進み具合は、風景が自立を主張する方向に向かっている。第八行の、木の下に吹き寄せ、幹にそって吹きおぼるそよ風は、何かの比喩として風景の外からもちこまれたのではなく、それまでに描き出された風景の内部から自然に吹いてきたというおもむきが強いのだ。「しっとりと吹き寄せるそよ風」は川面を

撫でるようにしてやって来た。流れる霧をここに見ることも可能だろう。霧はすべてを、「悔恨」をも薄く覆って、非現実的なものにしてしまう。もう何も聞こえない……。

何も、と思った途端、短いがはっきりとした声が風景の中に響いているのに気づく。それは、何のためらいもなく、自信をもって、今はいない女性性を称える声、しかも失われた恋のために永遠に煩悶しているかのような、物憂い声なのだ。その声は……鳥の声だった。この意外性からくる軽い驚きによって私たちは、この詩の心臓部における詩人の興奮の擬似体験をする。

「ぼくの初恋」だった鳥の声。この鳥はもはや六行目までの風景の構成要素のようなアレゴリックなものではない。第一行の直喩における鳥のイメージは、その場限りのものという印象を与えていた。しかし今第十三行で、思い出の中の思い出が「鳥（の声）」に象徴されるものであることがわかったのである。詩の冒頭の鳥は詩人にとって他の形象で置きかえることの不可能なものであったらしい。こうなると風景はにわかに現実味を帯びてくる。二人はかつてこの風景の中を歩いたのではなかったか。そしてそのとき、夜鳴き鶯が鳴いていたのではなかったか。

第十五行以降は、見る位置を変えたかのように視界が広がって、一枚のタブローを思わせる風景描写になっている。風景全体の上方に、厳かにのぼる月が輝き、その下に森の黒いシルエットが広がるという構図である。ところで、沈黙と闇にみちた夏の夜が「やさしい風が撫でて吹く青空に/震える木と泣く鳥をゆすっている」とは、どういうことだろうか。「青空」は夜と矛盾する。この詩の風景はもともとアレゴリックなものであり、現実の風景を写したわけではないのだから、矛盾に不思議はない、としてすまず立場もある¹¹⁾。しかしテキストが、目に見えるものとしての風景を指向している以上、ただちに頷くわけにはいかない。私たちとしては、このテキストからルネ・マグリットの超現実的な風景画「光の帝国」¹²⁾を思い浮かべてしまうのだが、そこまでは詩人も考えていなかったろう。むしろ、風景の中心となる木のかたわらに、川が流れていることを思い起こすべき

である。川面は、青白く寂しい月の光を浴びた木と鳥を映している。川の水面という媒体を通すことによって、夜の青空という非現実的イメージが肯定される。それは月の光に浸された水面の不可思議な変貌の結果としての青空である。昼間、水面は青空を映していた。思いやり深い夏の夜は、その青空をここに現出してくれるのである。この詩に描かれているのは、思い出のうちでも最も痛切な思い出に震え、涙する詩人の心、たとえ水面の幻影によってでも己れを癒してくれるものを求めざるをえない詩人の魂の状態の風景なのだといえよう。

「夜鳴き鶯」の全体をふりかえってみると、終りの六行のイメージが際立って印象的である。詩は直喩で始まるが、すぐに寓意による風景となる。風景はやがて自立して逆に詩人を中に包みこみ、ついに詩人の魂を象徴する風景イメージとなる。作品の統一性から見れば、これは欠陥のある作品にちがいない。とはいえ、マンデスの「夜鳴き鶯」と比較してみれば明らかなことだが、この詩にはヴェルレーヌ独自の魅力がある。それは、詩の中で展開された感情のドラマが完了することなく、静謐なイメージで詩が終っていても、くり返しを予想させることである。詩の風景の中では、夏の夜が木と鳥を幻影の揺り籠で揺すってくれる。木の震えはおさまり、鳥は泣くのをやめて眠りにつくかもしれない。しかし、やがてまた目覚めのときが来るだろう。マンデスの詩は才気を示しているが、感情の深みを感じさせない。話は完結しており、読む者は、そこから教訓じみたものをひきだして結論とすることもできるだろう。ヴェルレーヌ自身はマンデスの「夜鳴き鶯」を称えていたかもしれないが、彼が同じ題で作ったのは、のちの人がそこに象徴詩の萌芽を見たように、新たな可能性を秘めた詩であった。

註

- 1) Cf. Pierre Martino, *Verlaine*, nouvelle édition revue et corrigée, Boivin (Paris, 1951), pp. 57 - 58.
- 2) Cf. Jacques-Henry Bornecque, *Les Poèmes saturniens de Paul Verlaine*, édition augmentée, Nizet (Paris, 1977), p. 125.
- 3) *Epigramme (Les Priapées, N° CXX)*. Alan M. Boase, *The Poetry of France*, volume II 1600 - 1800, Methuen (London, 1973), p. 33.

- 4) André Gide, *Anthologie de la poésie française*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard (Paris, 1949), p. 313.
- 5) 「英詩のなかの鳥たち」伊沢東一訳、『ラフカディオ・ハーン著作集』第七巻, 恒文社(昭和60年), 333頁.
- 6) 同書, 336頁.
- 7) Boase, *op.cit.*, p. 64.
- 8) Catulle Mendès, *La Légende du Parnasse contemporain*, réimpression de l'édition de Brancart(Bruxelles, 1884), Slatkine Reprints (Genève-Paris, 1983), p. 160.

第二連以下を掲げておく.

Attentive, les yeux ravis, la bouche ouverte,
Comme sont les enfants au théâtre Guignol,
Elle écoutait le chant sous la frondaison verte,
Et moi, je me sentais jaloux du rossignol.

《Belle âme en fleur, lilas où s'abrite mon rêve,
Disais-je, laissez là cet oiseau qui me nuit
Ah! méchant cœur, l'amour est long, la nuit est brève!》
Mais elle n'écoutait qu'une voix dans la nuit.

Alors je crus subir une métamorphose/
Et ce fut un frisson dont je faillis mourir.
Dans un être nouveau ma vie était enclose,
Mais j'avais conservé mon âme pour souffrir.

Un autre était auprès de la seule qui m'aime,
Et tandis qu'ils allaient dans l'ombre en soupirant,
O désespoir! j'étais le rossignol lui même
Qui sanglotait d'amour dans le bois odorant.

Puis elle s'éloigna lentement, forme blanche,
Au bras de mon rival assoupie à moitié;
Et rien qu'à me voir triste et seul sur ma branche
Les étoiles du ciel s'émurent de pitié.

Ce fut tout; seulement, dès l'aurore prochaine,
(Je n'ai rien oublié: c'était un vendredi)
Des enfants qui passaient virent au pied du chêne
Un cadavre d'oiseau déjà sec et roidi.

《Il est mort!》dirent-ils, et de son doigt agile
L'un d'eux creusa ma fosse à l'ombre d'un roseau,
Et, tout en enfermant mes plumes sous l'argile,
Il pria le bon Dieu pour le petit oiseau.

- 9) Verlaine, *Œuvres en prose complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard (Paris, 1972), p. 493.
- 10) Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, nouvelle édition, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard (Paris, 1962), pp. 73 - 74.
- 11) Cf. Verlaine, *Œuvres poétiques*, édition Jacques Robichez, Classiques Garnier, Garnier Frères (Paris, 1969), p. 523.
- 12) 同題の一連の油彩画のうち、特に次の作品を参照のこと。 *L'Empire des lumières*, 1954. Collection Musées royaux des beaux-arts, Bruxelles. Cf. José Pierre, *Magritte*, Somogy (Paris, 1984), p. 91.